(8)は戸主名から書き始める正米の荷札である。貢進の各過程で記されたらしく三筆から成り、税を京へ輸す人を指すと思われる「上人」の記載がある。「上人」の記載は従来出土した木簡では越前国からの貢進物付札に限られており、また別氏の分布状況とから、越前国からの木簡とみておきたい。

(9)の五戸は五保（養老戸令五家条）の意味といい、長岡京では初出である。

(10)(11)は丁寧な作りの小型付札で、切り込みを「く」字型ではなく「コ」字型とする珍しい特徴をもつ。(11)は文字を線刻しており、用途は不明であるが吉祥札の一種であろうか。

(12)は木札に物忌と大字で記し、下部を空白とする。物忌札とすると早期の例となる。

（清水みき）

京都・長岡京跡(2)

1 所在地　京都府長岡京市神足三丁目二〇二―一

2 調査期間　一九八二年（昭57）六月～七月

3 発掘機関　長岡京市教育委員会

4 調査担当者　岩崎　誠

5 遺跡の種類　都城跡

6 遺跡の年代　平安時代（八世紀末）

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査は、共同住宅建設に伴い、長岡京跡右京第一〇二次（7ANMMK地区）調査として実施したものである。

（京都西南部）

当調査地は、平城京型条坊復元では、右京六条二坊四町にあたる。この調査地において、東西方向の溝二本が検出された。一方の溝（SD一〇二〇二）は、平安京期の遺物を出土し、他方（SD一〇二〇一）は、長岡京期の遺物を出土した。

溝SD一〇二〇一は、幅約二m、深さ約〇・八mで、長さ約五mまで確認できた。埋土は、有機質の黒色粘質土で、遺物から、短期間の堆積と考えられる。当溝からは、本報告の木簡の他、人形、ハシ、櫛、木製皿等の木製品や、須恵器、土師器の土器類、布切れ、わらじ等が出土した。中でも興味を引くものとして、墨書土器がある。墨書土器は、全て土師器で、皿、埦類の底部外面に「一」と書かれたものが四点ある。これらの遺物から、長岡京に関係することは確実と思われる。溝の性格は、その検出位置から推して、六条大路北側溝か、六条二坊四町内の地割溝と考えられる。

8　木簡の釈文・内容

(1)　・「〈自司進□×　　(72)×19×5　039

　　・「〈三年十二×

(2)　・　□□〔一月カ〕」

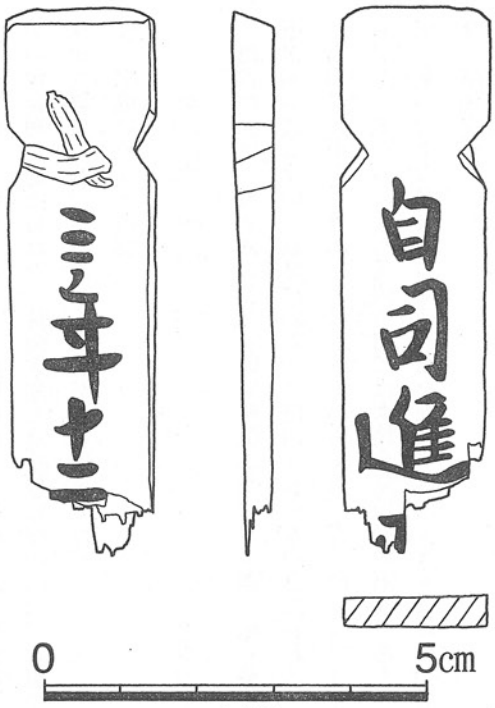
　　・×□　　」　　(106)×28×6　019

(1)は下が欠損しているが、「司自り進む」と読める。何の司かが不明であるが、西市の司を想定するのは、冒険であろうか。もう一面は三年十二月と読める。これを延暦三年（七八四）とすれば、長岡遷都の一ヶ月後であり、遷都直後に、六条二坊四町付近に所在した官司が、その役割を十分果していたことになろう。また、(1)の木簡に見られる切り込みには、繊維状のものが付着している。

9　関係文献

岩崎誠「右京第一〇二次（7ANMMK地区）調査略報」（長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報』一九八三年）

（岩崎　誠）



木簡(1)